

『唐子西文録』 訳注稿 (下)

大島 絵莉香
矢田 博士

〔解題〕

前稿(第二十五輯所収)に続き、本稿では『唐子西文録』全三十五条のうちの第十七条から第三十五条までの訳注を掲げる。

〔凡例〕

◇ テキストは、清・何文煥輯『歴代詩話』(中華書局、一九八一年四月第一版)を底本とした。

◇ 底本で校異が示されている部分については、原文に〔校〕と付してその箇所を示し、【校異】の項目を設けて

訳出した。

◇ 【訓読】の項目の書き下し文については、漢字の読み

(ルビ)は現代仮名遣いを、送り仮名は旧仮名遣いを用いた。

十七

近世士大夫、習爲時學忌博聞者、率引經以自強。余謂挾天子以令諸侯、諸侯必從、然謂之尊君則不可。挾六經以令百氏、百氏必服、然謂之知經則不可。

【訓読】

近世の士大夫の、習ひて時學と爲るも博聞を忌む者は、率ね經を引きて以つて自ら強む。余 謂へらく、天子を挾みて以つて諸侯に令せば、諸侯は必ず従ふも、然れども之れを君を尊ぶと謂ふは則ち不可なり。六經を挾みて以つて百氏に令せば、百氏は必ず服するも、然れども之れを經を知ると謂ふは則ち不可なり、と。

【語釈】

※士大夫：学徳により民を教え導く立場にある知識人層。

※時学：当時の学者。

※博聞：あらゆる方面から幅広く知識を習得すること。ここでは、

儒教の經典のみならず、諸子百家をはじめ、あらゆる学説を幅広く学ぶことを言う。

※挾天子以令諸侯：幼い天子を自分の脇に置いて、その權威を利用して諸侯に命令を下すこと。三顧の礼を尽くして会いに来た

劉備に対して、諸葛亮が三国の情勢を分析し今後の方針を授けた、いわゆる「草廬対」(『三国志』卷三十五「蜀書五・諸

葛亮伝)に見える以下の言葉を踏まえる。——今操已擁百萬

之衆、挾天子而令諸侯。此誠不可與爭鋒(今(曹)操 已に

百萬の衆を擁し、天子を挟みて諸侯に令す。此れ誠に與に鋒を争ふべからざるなり)——

※六經：儒教の六つの經典。『楽經』『易經』『詩經』『書經』『春秋』

『礼記』。ただし、『楽經』は散佚して伝わらない。

※百氏：諸子百家をはじめ、儒家以外のさまざまな学説のこと。『漢

書』卷百下「叙伝下」に、——緯六經、綴道綱、總百氏、贊

篇章(六經を緯^{たは}ねて、道綱を綴り、百氏を總べて、篇章を贊^{あきら}

かにす)——とあり、南朝梁・江淹の「知己賦」に、——故

學不常師、而心鏡羣籍。……潜志百氏、沈神六經(故に學は

常師あらずして、而して心は羣籍を鏡とす。……志を百氏に

潜ましめ、神を六經に沈ましむ)——とあるなど、「六經」と

対にして言及されることが多い。

※百氏必服：國政の拠り所とされる儒教の經典の權威を利用して、

自らの主張をすれば、その他の学説を唱える者は、屈服せざるを得ないことを言う。

※知經：儒教の經典を真に理解すること。中唐・韓愈の「讀儀禮(儀

禮を讀む)に、——百氏雜家、尚有可取。況聖人之制度邪(百

氏雜家すら、尚ほ取るべき有り。況んや聖人の制度をや)——

——とあるように、儒教以外のあらゆる学説を幅広く学んでこ

そ、儒教の經典に対する理解も深まることを言う。

【通釈】

近世の士大夫の中で、学習して時の学者となったものの、その後さまざまな知識を広く聞き知ることを嫌う者は、おおむね經書を引用して自説を強化しようとする。私が思うに、天子を自分の脇に置いて、諸侯に命令を下せば、諸侯は必ず従うだろうが、しかしそれを君主を尊ぶ行為と言つてよいかといえ、それは違うだろう。同様に儒教の經典を脇に置いて、他の学説を唱える者たちに自らの考えを主張すれば、彼らは必ず屈服するだろうが、しかしそれを真に經書を理解していると言つてよいかといえ、それも違うだろう、と。

(中国文学専攻 学部四年 渡邊光歩)

十八

王荊公五字詩、得子美句法。其詩云「地蟠三楚大、天入五湖低」。

王荊公の五字の詩は、子美の句法を得たり。其の詩に「地は三楚に蟠わたかまりて大なり、天は五湖に入りて低し」と云ふ。

【語釈】

※王荊公：北宋・王安石のこと。字は介甫、半山と号した。神宗のとき、宰相に抜擢され、「新法」と呼ばれる政治改革を断行した。荊国公に封ぜられたので、王荊公とも称される。

※子美：盛唐・杜甫のこと。子美はその字。

※「地蟠」の二句：王安石の五言律詩「次韻唐公（唐公に次韻す）」

三首・其三の頷聯と思われる。ただし、南宋・李壁注『王荊文公詩』卷二十三をはじめ、諸本いずれも「地大蟠三楚、天低入五湖（地は大にして三楚に蟠り、天は低くして五湖に入る）」に作り、ここに引用されている句とは、文字の配置が異なる。あるいは、三首・其一首の首聯に、「山蔽吳天密、江蟠楚地深（山は吳の天を蔽ひて密なり、江は楚の地に蟠りて深し）」とあり、また「吳江」詩の頷聯に、「地留孤嶼小、天入五湖深（地は孤嶼を留めて小なり、天は五湖に入りて深し）」とあるように、王安石には他にも類似の句が存在することから、記憶の面でこれらの句が混在したのであろうか。

【訓読】

ちなみに王安石は、原文で引用されている句と同じ構造の

句による対句を好んで用いており、上記に挙げた例のほかにも、「歳晚」詩の「月映林塘澹、風含笑語涼（月は林塘に映りて澹く、風は笑語を含んで涼し）」や、「宿雨」詩の「魚吹塘水動、雁拂塞垣飛（魚は塘水を吹きて動き、雁は塞垣を拂ひて飛ぶ）」、「飯祈澤寺（祈澤寺に飯す）」詩の「魚隨竹影浮、鳥誤人語散（魚は竹影に隨ひて浮かび、鳥は人語と誤りて散ず）」や、「寄深州晁同年（深州の晁同年に寄す）」詩の「日催花蕊急、雲避雁行高（日は花蕊を催して急に、雲は雁行を避けて高し）」などがある。

なお、杜甫もまた、同様の対句を好んで用いている。例えば、「春宿左省（春に左省に宿す）」詩の「星臨萬戶動、月傍九霄多（星は萬戸に臨みて動き、月は九霄に傍ひて多し）」や、「屏跡」三首・其三の「鳥下竹根行、龜開萍葉過（鳥は竹根に下りて行き、龜は萍葉を開きて過ぐ）」、「泛江送客（江に泛びて客を送る）」詩の「淚逐勸杯下、愁連吹笛生（淚は勸杯に逐しひて下り、愁ひは吹笛に連なりて生ず）」などがその例である。唐庚が謂う所の「子美の句法」とは、このような構造の句による対句法を指しているのであろう。

※三楚：楚は春秋戦国時代に長江の中下流域一帯を領土としてい

た国の名。楚は領土が広がったため、秦漢の時代になって、西楚・東楚・南楚の三つの地域に分けられた。それを総称して三楚という。

※五湖：五つの湖。どの湖を指すかについては、諸説紛々として
いる。ここでは、洞庭湖や鄱陽湖、太湖など、かつての楚の
国の領土にあつた長江中下流域の湖を指すであろう。

【通釈】

王安石の五言詩は、杜甫の句法を得ている。その詩に「地は三楚にすっかりと根を張ったかのように広大で、天は五湖の中に入り込むかのように低い」と歌う。

（中国文学専攻 学部四年 岩田 碧）

十九

『文選』三賦、「月」不如「雪」、「雪」不如「風」。

【訓読】

『文選』の三賦、「月」は「雪」に如かず、「雪」は「風」に如かず。

【語釈】

※『文選』：南朝梁・蕭統（昭明太子）の名のもと、劉孝綽が編纂

した詞華集。周から南朝梁までの規範となる約八百篇の詩文を収める。唐代以降、士大夫層の必須の教養書となる。

※三賦：戦国楚・宋玉の「風賦」、南朝宋・謝惠連の「雪賦」、南朝

宋・謝荘の「月賦」の三つの賦のこと。いずれも『文選』巻十三に収められている。「賦」は、韻文の一種。「賦」とは、「敷、舖（敷き並べる）」の意で、事物・事象を様々な角度から取り上げ、それらを敷き並べて叙述する点に特徴がある。

※「月」：南朝宋・謝荘の「月賦」のこと。謝荘は、字を希逸と言

う。陳郡陽夏の名門謝氏の一人で、謝靈運や謝惠連よりも一つ下の世代に属する。七歳で文を作ることができ、『論語』に通暁していたと言う。「月賦」は、後漢末の曹植と王粲のやりに似て仮託して月を詠じたもの。「美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月（美人邁ゆきて音塵かくるも、千里を隔てて明月を共にす）」は、離れた人と人々を結びつけるよすがとしての月の効用的確に表現した名句と言えよう。

※「雪」：南朝宋・謝惠連の「雪賦」のこと。謝惠連については、

第四条の【語釈】を参照。「雪賦」は、前漢の梁王がその酒宴

の席に連なった司馬相如や牧乘などの文人たちに命じるといふ設定のもとで、雪の美しさを詠ったもの。

※「風」：戦国楚・宋玉の「風賦」のこと。宋玉は、屈原の後継者

とも目される辞賦の代表的な作家で、『楚辞』に「九辨」「招魂」の二篇が収められ、『文選』にも「風賦」のほか「高唐賦」「神女賦」「登徒子好色賦」などが収められている。「風賦」は、宋玉が楚の襄王と蘭台を訪れた折りに、快く吹きつける風をめぐり、風に貴賤の別はないとする襄王に対して、風に「大王の風」と「庶民の風」の別があることを説いたもの。

【通釈】

『文選』に収める三つの賦について、「月の賦」は「雪の賦」に及ばず、「雪の賦」は「風の賦」に及ばない。

（社会学専攻 学部三年 魚形美鈴）

二十

東坡隔句對、「著意尋彌明、長頸高結喉、無心逐定遠、燕頰飛虎頭」。或云、「結」、古「髻」字也。退之序、是「長頸高結、喉中又作楚語」。

【訓読】

東坡の隔句對にいふ、「意を著く 彌明の、長頸にして高結の喉なるを尋ぬるに。心無し 定遠の、燕頰 飛虎の頭なるに逐しがふに」と。或るひと云ふ、「結」は、古の「髻」の字なりと。退之の序は、是れ「長頸にして高結、喉中に又た楚語を作す」なり。

【語釈】

※東坡：北宋・蘇軾のこと。東坡はその号。

※隔句對：對句法の一つ。四句のうち、第一句と第三句、第二句と第四句とを、それぞれ一句を隔てて對にするもの。

※「著意」の四句：北宋・蘇軾の「正輔既見和、復次前韻、慰鼓盆 勸學佛（正輔 既に和せられ、復た前韻に次し、鼓盆を慰め 佛を學ばんことを勸む）」詩の一節。蘇軾六十一歳、惠州流謫期の作。「正輔」は蘇軾の母方の従兄、程之才（字は正輔）のこと。この頃、惠州の蘇軾の許を訪れ、しばしば詩の応酬をしていた。「鼓盆」は妻を失うこと。ここでは、哲宗の紹聖三年（一〇九六）七月に蘇軾が妾の朝雲を亡くしたことを指す。

※「著意」の二句：「著意」は、関心を寄せること。「彌明」は、

衡山に隠棲する軒轅彌明という名の道士で、中唐・韓愈の「石鼎聯句序」に登場する（※退之序を参照）。「長頸」は、長い首。「高結喉」は、高く突き出た喉仏。軒轅彌明の醜い容姿を形容する。この二句では、世俗のしがらみに縛られない軒轅彌明のような生き方に心を寄せていることを言う。

※「無心」の二句：「無心」は、関心がないこと。「定遠」は、後漢の班超のこと。『漢書』を書いた班固の弟。西域都護として武事に携わること三十年。遠国を定めた功績により定遠侯に封ぜられた。若い頃、人相見に人相を見てもらったところ、——生燕頰虎頭、飛而食肉、此萬里侯相也（生まれながらにして燕頰虎頭、飛びて肉を食らふ、此れ萬里侯の相なり）——と言われたという（『後漢書』卷四十七「班超伝」）。以後、「燕頰虎頭」「燕頰虎頭」は、武威により諸侯に封ぜられる貴相の形容として用いられる。細くとがった頸に、大きな頭を言うか。この二句では、班超のように功業を挙げて高位高官を得るような生き方には、もはや関心がないことを言う。

※髻：髪の毛をまとめて頭の上で束ねたところ。またその髪。

※退之序：中唐・韓愈（字は退之）の「石鼎聯句序」。韓愈の友人である劉師服と侯喜が、「石の鼎」を題材に軒轅彌明と詩才を

競って作った聯句詩に、韓愈が付した序文。はじめ劉師服と侯喜の二人は、その容姿の醜さもあつて軒轅彌明を見くびつていたが、ほどなくして打ち負かされるといふもの。

※「長頸」の二句：底本（清・何文煥輯『歷代詩話』、中華書局、

一九八一年四月第一版）では、「長頸高結喉、中又作楚語」と句を区切っているが、南宋・胡仔の『茗溪漁隱叢話』前集巻九に引く『唐子西語録』では、「長頸高結」と「喉中又作楚語」の間に、「句斷」という注が施されている。この注が唐庚自身の句読を反映しているか否かは、にわかには判断できないが、南宋以降、この二句を巡つての議論では、いずれも唐庚の注として扱っていることから、ここではそれに従つて句読を改めた（【備考】を参照）。

なお、底本の句読に従えば、「高結喉（高く突き出た喉仏）」となり、蘇軾の解釈の妥当性を支持する論拠として、唐庚が韓愈の序を引用したことになるが、『茗溪漁隱叢話』に引く『唐子西語録』の句読に従えば、「高結（高く結つた鬚）」となり、「或るひと」の説を支持する論拠として、韓愈の序を引用したことになる。

※楚語：楚の地方（湖北省と湖南省を中心とした地域）の訛り。軒

轅彌明が棲む衡山は、湖南省南部にあり、五岳の一つに数えられ、南岳と称される。

【通釈】

蘇軾の隔句対に「首が長く喉仏の突き出た轅彌明を訪ねてみたいという気持ちはあるが、燕のような顎で虎のような頭の班超に従つて功名を挙げたいとは思わない」とある。ある人が言うには、「結」は、昔の「髻」の字に同じであると。韓愈の序は、「長い首に高く結つた鬚、喉の中からはさらに楚の訛りが発せられる」と言っている。

【備考】

韓愈の「石鼎聯句序」に見える「長頸」二句について、南宋・方崧卿は『韓集舉正』巻七の中で、——唐子西曰「結、古髻也。高結、當句斷」。按漢陸賈傳「尉佗難結箕踞」。顔曰「結、讀曰髻。難音椎。一撮之髻。其形如椎」。高結原此也（唐子西曰「結は、古の髻なり。高結もて、當に句斷たるべし」と。按づるに、漢の陸賈の傳にいふ、「尉佗は難結にして箕踞す」と。顔（師古）曰く「結は、讀みて髻と曰ふ。難は椎を音とす。一撮の髻なり。其の形は椎の如し」と。高結は此れに原づくなり）——と言ひ、「高結（高く結つた鬚）」説を支持する。

また、南宋・朱熹は、『原本韓集考異』巻六の中で、方崧卿の説を批判して、——今按、……但道士之首、加冠不作椎髻。讀「結」為「髻」、而以「喉」屬下句者、雖有據而非是。蓋長頸故見其結喉之高（今按づるに、……但だ道士の首、冠を加ふれば椎髻を作さざるなり。「結」を讀みて「髻」と為し、而して「喉」を以つて下句に屬せしむるは、據る有りとも雖も是に非ず。蓋し長頸なるが故に其の結喉の高きを見るなり）——と云う。

さらに、清・何焯は、『義門讀書記』巻三十二の中で、——按此詩中「上為孤髻撐」、為譏道士語。此又以「加冠」致疑、何也（按づるに、此の（聯句）詩中の「上には孤髻の撐へたるを為す」は、道士を譏るの語たり。此れ又た「冠を加ふる」を以つて疑を致すは、何ぞや）——と、朱熹の説に疑問を示す。

なお、南宋・吳曾の『能改齋漫錄』巻五、明・張萱の『疑耀』巻二、明・楊慎の『丹鉛餘錄』総録卷十三などにも、この問題についての見解が見られるが、いずれも「高結（高く結った髻）」を是としている。

（中国文学専攻 学部三年 鈴木詩歩）

余作「南征賦」、或者稱之。然僅與曹大家輩爭衡耳。惟東坡「赤壁」二賦、一洗萬古。欲彷彿其一語、畢世不可得也。

【訓読】

余 「南征の賦」を作るに、或る者 之れを稱す。然れども僅かに曹大家の輩と衡を争ふのみ、と。惟だ東坡の「赤壁」の二賦のみ、萬古を一洗す。其の一語に彷彿たらしめんと欲するも、世を畢ふるまで得べからざるなり。

【語釈】

※「南征賦」：唐庚が惠州（広東省）に貶謫された折りに、都開封から惠州に至る道中の情景や心情を、「賦」の様式で詠ったもの。徽宗の大觀四年（一一一〇）、四十歳の時の作とされ、『眉山唐先生文集』巻一に収められている。第二十八条を参照。

※曹大家：後漢の班昭のこと。『漢書』を著した班固は、その兄にあたる。十四歳で曹世叔に嫁ぎ、夫の死後、和帝によって後宮の後妃の師に拔擢された。その才名により、人々は敬して曹大家（「家」は「姑」の意）と称した。また、辞賦に優れ、父の班彪が「北征賦」を作ったのに倣い、「東征賦」を作った

(いずれも『文選』巻九に収められている)。

※争衡：優劣を競うこと。ここでは、唐庚の「南征賦」と班昭の「東

征賦」とを比較して言う。班昭の「東征賦」は、陳留郡長垣

県(河南省)の県令になった息子の曹毅の赴任に同行した折

りの作で、都洛陽から長垣県までの道中の情景や心情を詠う。

※東坡「赤壁」二賦：東坡は北宋・蘇軾の号。「赤壁」二賦は、烏

台詩案によつて、黄州(湖北省黄冈市)に流謫されていた折

りの作。神宗の元豊五年(一〇八二)七月と十月に、黄州西

辺の長江北岸にある赤鼻山(赤鼻磯)を、二度に亘り訪れ作

つたもの。両者を区別するため、「前赤壁賦」「後赤壁賦」と

も称される。なお、三国時代の赤壁の戦いの古戦場とは、位

置が異なるため、以後、古戦場を「武の赤壁」、蘇軾の賦に詠

われる赤壁を「文の赤壁」「東坡赤壁」と称して区別する。

※彷彿：おおむね似ていること。

【通釈】

私が「南征の賦」を作つたところ、ある人がそれを褒めてくれた。しかし、せいぜい曹大家の「東征の賦」と五角の勝負にすぎないという。ただ蘇軾の「前赤壁の賦」と「後赤壁の賦」の二篇だけは、昔から今に至るまでのすべての作品を

洗い清めるかのような優れた作である。なんとかその一語一語に似せたいと思うけれども、一生かかっても会得できないであろう。

(中国文学専攻 学部三年 林 美江)

二十二

凡爲文、上句重、下句輕、則或爲上句壓倒。「畫錦堂記」云「仕宦而至將相、富貴而歸故郷」、下云「此人情之所榮、而今昔之所同也」。非此兩句、莫能承上句。

「居士集序」云「言有大而非誇」。此雖只一句、而體勢則甚重。下乃云「達者信之、衆人疑焉」。非用兩句、亦載上句不起。韓退之與人書云「泥水馬弱不敢出、不果鞠躬親問、而以書」。若無「而以書」三字、則上重甚矣。此爲文之法也。

【訓読】

凡そ文を爲るに、上句 重くして、下句 軽ければ、則ち或るいは上句の壓倒するところと爲らん。「畫錦堂の記」に「仕宦して將相に至り、富貴にして故郷に歸る」と云ひ、下に「此

れ人情の榮とする所にして、而して今昔の同じくする所なり」と云ふ。此の兩句に非ざれば、能く上句を承くること莫からん。

「居士集の序」に「言には大なるも誇るに非ざる有り」と云ふ。此れ只だ一句のみと雖も、而れども體勢は則ち甚だ重し。下に乃ち「達者は之れを信じ、衆人は焉を疑ふ」と云ふ。兩句を用ふるに非ざれば、亦た上句を載するも起たざらん。

韓退之の人に與ふるの書に「泥水に馬も弱くして敢て出でず。鞠躬して親ら問ふを果たさず、而して書を以つてす」と云ふ。若し「而以書（而して書を以つてす）」の三字無くんば、則ち上の重きこと甚しからん。此れ文を爲るの法なり。

【語釈】

※「畫錦堂記」：北宋・歐陽脩の「相州畫錦堂記」のこと。「畫錦

堂」は、北宋・韓琦が故郷の相州（河南省）に建てたもので、

その名は『史記』卷七「項羽本紀」に見える項羽の言葉、す

なわち——富貴不歸故郷、如衣繡夜行。誰知之者（富貴にし

て故郷に歸らずんば、繡を衣て夜に行くが如し。誰か之れを

知る者ならんや）——を踏まえる。国政に与るのは天下万民

のためであり、自らの功名を故郷に誇るためではないとの戒

めからの命名で、歐陽脩の「相州畫錦堂記」は、韓琦のそのような志を称えたもの。

※居士集序：北宋・蘇軾の「六一居士集序」。六一居士は、北宋・

歐陽脩の号（第十二条の【語釈】を参照）。歐陽脩の『六一居士集』に付した序文。

※體勢：詩文などの格調や風格。

※韓退之與人書：韓退之は、中唐・韓愈のこと。退之はその字。「與人書」とは、韓愈の「與李祕書論小功不稅書（李祕書に與へて小功不稅を論ずるの書）」のこと。「小功」とは、「五服（斬衰、

「三年間」・齊衰「一年間」・大功「九ヶ月間」・小功「五ヶ月間」・緦麻「三ヶ月間」）の一つで、五ヶ月間の喪に服すること。死者との関係の親疎によって、喪期が段階的に定められていた。「稅服」とは、定められた喪期を過ぎてから、人の死

を知り、追つて喪に服すること。「小功」と「緦麻」は、稅服

しないものとされていた。韓愈の手紙は、喪期に間に合わず、

「小功」の喪に服することができない人が常に数多く見られる現状について、李祕書に見解を求めたもの。

※鞠躬：身かがめる。相手を敬い謹むさま。

【通釈】

おおよそ文を作るには、上の句が重く、下の句が軽ければ、ことによると下の句が上の句に押し倒されてしまうだろう。

欧陽脩の「畫錦堂の記」に「仕官して將軍や宰相に昇りつめ、富貴となつて故郷に帰る」とあり、下に続けて「これは人の情の蒼れとするところであり、今も昔も変わらぬことである」とある。この二句でなかつたならば、上の句を承けることはできないであろう。

蘇軾の「居士集の序」に「言葉には、言っていることは大きい、誇張でないものがある」とある。これはわずかに一句だけではあるが、風格という点では甚だ重い。下には実に「道理に熟達している者はその言葉を信じるが、ふつうの人はそれを疑うだろう」の二句が続く。二句を用いるのでなければ、上の句を載せたとしても、やはり支えきれないだろう。韓愈の人に与えた書簡に「道もぬかるみ馬も疲れていたので出かけることができませんでした。自ら謹んで訪問することも果たせず、それゆえ書簡にて失礼した次第です」とある。もし「而以書（それゆえ書簡にて失礼した次第です）」の三字がなければ、上の句が重くなりすぎてしまうだろう。これらのことは、文を作るときの手本である。

（中国文学専攻 学部三年 古川愛子／

中国文学専攻 学部二年 袴田悠太／

中国文学専攻 学部二年 長谷川浩平）

二十三

東坡赴定武、過京師、館于城外一園子中。余時年十八、謁之。問余、「觀甚書」。余云「方讀『晉書』」。卒問、「其中有甚好亭子名」。余茫然失對。始悟前輩觀書用意蓋如此。

【訓読】

東坡 定武に赴くに、京師に過ぎり、城外の一園子の中に館す。余 時に年十八、之れに謁す。余に問ふ、「甚なんの書を觀るか」と。余 云ふ、「方に『晉書』を讀めり」と。卒すなはかにして問ふ、「其の中に甚なんの好き亭子の名有るか」と。余 茫然として對ふるを失ふ。始めて前輩の書を觀るに意を用ふること蓋し此くの如きを悟る。

【語釈】

※東坡：北宋・蘇軾のこと。東坡はその号。

※定武：定州（河北省）のこと。南宋・王存の『元豊九域志』巻二

「河北路」に、——定州、博陵郡、定武軍節度。唐義武軍節度、皇朝太平興國元年改定武軍。治安喜縣（定州、博陵郡、

定武軍節度。唐の義武軍節度、皇朝の太平興國元年（九七六）、

定武軍に改む。安喜縣を治とす）——とある。なお、蘇軾は、

哲宗の元祐八年（一〇九三）に定州の知事に就任している。【備

考】を参照。

※甚：「なに、どんな」の意を表す疑問詞。口語的な表現。

【通釈】

蘇軾が定武に赴任する際に、都・開封に立ち寄り、郊外のとある庭園の中に宿泊した。私は当時十八歳で、蘇軾先生の許を訪れた。私に「どんな本を読んでいるのかね」と尋ねられたので、私は「ちょうど『晋書』を読んでいます」と答えた。すると唐突に「その中に何かよい亭子あずまやの名でも見えるかね」とお尋ねになった。私は茫然として返す言葉を失った。先輩が本を読むにあたって、このようなことに意識を向けているのかということ、その時はじめて悟ったのである。

【備考】

南宋・呂榮義の「眉山唐先生文集序」に、——今先生之文、予知

其不久而遂顯也。先生死不一年、果有棄其文以來京師者。而太學之士日傳千百本而未已。然惜其所傳止此。今始序而藏之。庶幾他日必有得其完本者。宣和四年八月十五日序（今 先生の文、予め其の久しからずして遂に顯るるを知るなり。先生 死すること一年ならずして、果たして其の文を棄ふくろして以つて京師に來たる者有り。而して太學之士日に傳ふること千百本にして未だ已まず。然れども惜しむらくは其の傳ふる所 此れに止まるを。今 始めて序して之れを藏す。庶幾こいねがはくは他日 必ず其の完本を得る者有らんことを。宣和四年八月十五日 序す）——とある。これによれば、唐庚の卒年は、徽宗の宣和四年（一一二二）の前年、すなわち宣和三年（一一二二）ということになる。また、強幼安の「唐子西文錄記」によれば、享年五十一歳であることから、生年は神宗の熙寧四年（一〇七二）ということになる。だとすれば、哲宗の元祐三年（一〇八八）に唐庚は十八歳ということになり、蘇軾が定州に赴任した元祐八年（一〇九三）とは、時期的に合致しないことになる。ちなみに、元祐三年（一〇八八）、蘇軾は翰林学士・知制誥として都の開封にいた。あるいは、強幼安の記憶が正しいであろうか。

（人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程二年 大島絵莉香）

關子東一日寓辟雍、朔風大作。因得句云「夜長何時旦、苦寒不成寐」。以問先生云「夜長對苦寒。詩律雖有對對、亦似不穩」。先生云「正要如此。一似藥中要存性也」。

【訓読】

關子東 一日 辟雍へきように寓するに、朔風 大いに作る。因りて句を得て「夜 長くして 何れの時にか且ならん、寒きに苦しみて 寐ぬるを成さず」と云ふ。以つて先生に問ひて云ふ、「夜長（夜 長し）もて苦寒（寒きに苦しむ）に對す。詩の律に對を對くくこと有りと雖も、亦た穩やかならざるに似たり」と。先生 云ふ、「正に要かならず此くの如くなるべし。一に藥中に存性を要むるに似たるなり」と。

【語釈】

※關子東：南宋初・關注のこと。子東はその字。強幼安に唐庚の語録をまとめるよう求めてきた人。「唐子西文録記」および【語積】を参照。

※辟雍：天子の大学。大射の礼を行うところ。

※正要如此：まさにこうでなくてはならない、の意。南宋・周輝の

『清波雜志』卷八に、南宋・葛立方の『韻語陽秋』を引いて、

——沈存中云、退之「城南聯句」「竹影金鎖碎」者、日光也。

恨句中無日字爾。余謂不然。杜子美云「老身倦馬河堤永、踏盡黃榆綠槐影」、亦何必用日字。作詩正要如此〔沈存中云ふ、退之の「城南聯句」の「竹影 金鎖碎く」なる者は、日の光なり。句中に日の字無きを恨むのみ、と。余 謂へらく、然らずと。杜子美に「老身 倦馬 河堤永し、踏み盡くす 黃 榆 綠槐の影」と云ふも、亦た何ぞ必ずしも日の字を用ひんや。詩を作るは正に要ず此くの如くなるべし。——とある。

※存性：漢方藥の製劑方法の一つ。藥劑を炭火であぶり外面を炭化させつつ、藥性を内部に保存するというもの。即効性があり、止血藥などに使用された。

【通釈】

ある日、關注が辟雍に寄宿した折り、北風が激しく吹き起こった。その時「夜は長くいつになったら朝を迎えるのか。寒さに苦しみ眠れずにいる」という句が浮かんだ。そこで唐庚先生に尋ねて、「夜が長いという言葉と寒さに苦しむという言葉を対にしてみました。詩の規則にはあえて対を破るとい

うことがありませんけれども、どうもじっくりしないようです」と言った。すると先生が答えて言うには、「詩を作るには、まさにそのように熟考しなくてはいけない。安易に句を求めるのは、まったく薬の中から即効薬の炭剤を求めるようなものだ」と。

(中国文学専攻 学部四年 渡邊光歩)

二十五

蜀道館舎壁間題一聯云、「天生仲尼、萬古如長夜」。不知何人詩也。

【訓読】

蜀道の館舎の壁間に一聯を題して云ふ、「天 仲尼を生まざれば、萬古 長夜の如し」と。何人の詩なるかを知らざるなり。

【語釈】

※「天下」の二句：天が孔子を生み出さなかったならば、聖人の教

えを伝える後継者が続て現れることがなくなるため、この

世は延々と続く闇夜のものであっただろう、という意味。当該の二句は、『朱子語類』卷九十三「孔孟周程張子」の中でも取り上げられており、南宋・蔡元定（字は季通）は、五百年ごとくに聖人が出現するという孟子の説を踏まえつつ、——天先生伏羲・堯・舜・文王。後不生孔子、亦不得。後又不生孟子、亦不得。二千年後又不生二程、亦不得（天は先づ伏羲・堯・舜・文王を生む。後ち孔子を生まざれば、亦た得ず。後ち又た孟子を生まざれば、亦た得ず。二千年の後ち又た二程（程顥・程頤）を生まざれば、亦た得ず）——と言う。

【通釈】

蜀に至る道中の宿舎の壁に一聯二句が書き付けてあり、「天が孔子を生み出さなかったならば、この夜は万古の昔から延々と続く夜のものであっただろう」と言う。どこの誰の詩かは分からない。

(中国文学専攻 学部四年 岩田 碧)

二十六

蘇黃門云、「人生逐日、胸次須出一好議論。若飽食煖衣、惟

利欲是念、何以自別于禽獸。予歸蜀、當杜門著書。不令廢日、只效温公『通鑑』様、作議論商畧古人、歲久成書、自足垂世也」。

【訓読】

蘇黃門 云ふ、「人生 日を逐へば、胸次より須らく一つの好しき議論を出すべし。若し飽食煖衣にして、惟だ利欲のみ是れ念はば、何を以つてか自ら禽獸に別あらんや。予 蜀に歸らば、當に門を杜して書を著すべし。日を廢れしめず、只だ温公の『通鑑』の様に效ひ、議論を作すに古人に商畧し、歲久しくして書を成せば、自ずと世に垂るるに足るなり」と。

【語釈】

※蘇黃門：北宋・蘇轍のこと。字は子由、号は欒城。蘇軾の弟。「黄門」は門下省のこと。門下侍郎にまで昇進したことから、蘇黃門とも呼ばれる。蘇軾とともに唐宋八大家の一人に数えられる。

※温公『通鑑』：温公は、北宋・司馬光（字は君実）のこと。太師

温国公の称号を贈られたことから、司馬温公とも呼ばれる。『通鑑』は、司馬光が著した歴史書『資治通鑑』のこと。周・威

烈王の二十三年から五代後周・世宗の顯徳六年までの約一三〇〇年に亘る歴史を編年体で綴る。司馬光は、神宗の時、御史中丞となるも、王安石の新法に反対したため、朝廷から退けられ、洛陽で隱居生活を送ることとなった。その時に門を閉ざし外部との接触を絶つて著したのが『資治通鑑』であった。

※商畧：相談する。協議する。

【通釈】

蘇轍が言った、「人として生まれ、日を追いかけて過ぐすかには、胸中から必ず一つでも真つ当な意見を出すべきである。もし腹いっぱい食べて暖かい衣服に包まれながら、ただ利欲だけに思いを凝らしているとすれば、人は何によって禽獸と区別されるのであろうか。私は蜀に帰つたならば、きつと門を閉ざして著述に専念することだろう。一日一日を無駄にせず、ただ司馬光が『資治通鑑』を著した時の姿勢に倣つて、自らの意見を示すにあたり、古人の考えと照らし合わせて検討を重ね、長い時間をかけて書籍を書き上げたならば、自ずと後世にも伝わるに堪えうるものとなるだろう」と。

【備考】

蘇轍もまた、司馬光と同様、王安石の新法には反対の姿勢を示していた。ここで言う「温公の『通鑑』の様に效ふ」とは、単に門を開き、さして書籍を著すという表面的な行為のみならず、新法に対する批判的な姿勢をも見習いたいという思いも含まれている。

(社会学専攻 学部三年 魚形美鈴)

二十七

張文昌詩、「六宮才人大垂手。願君千年萬年壽、朝出射麋暮飲酒」。古樂府大垂手・小垂手・獨搖手、皆舞名也。

【訓読】

張文昌の詩にいふ、「六宮の才人 大垂手。願はくは君が千年萬年の壽ならんことを、朝に出でて麋を射て 暮に酒を飲む」と。古樂府の大垂手・小垂手・獨搖手は、皆な舞の名なり。

【語釈】

※張文昌：中唐・張籍のこと。文昌はその字。韓愈に薦められて国子博士となる。詩作の面では、樂府を得意とし、王建とともに

に「張王」と並称される。

※「六宮」の三句：張籍の「楚宮行」の末尾の三句。ただし、『全

唐詩』卷三八二は、「六宮」の句を「迴身垂手結明璫（身を迴らし手を垂れ 明璫を結ぶ）」に作り、「朝出」句の「暮」を「夜」に作る。

※六宮：皇后の住む六つの宮殿の総称。後宮のこと。正寝（表御殿）

が一つ、燕寝（居間）が五つあった。

※才人：宮中の女官。

※古樂府：ここでは唐代以降に作られた新題樂府に対して、漢魏六朝期に作られた樂府題を指している。

※大垂手・小垂手・獨搖手：いずれも樂府題。北宋・郭茂倩の『樂

府詩集』卷七十六「雜曲歌辭」は、『樂府解題』の記述、すなわち——「大垂手」「小垂手」、皆言舞而垂其手也（「大垂手」

「小垂手」は、皆な舞ひて其の手を垂るるを言ふなり）——を引いたうえで、さらに、——又「獨搖手」亦與此同（又た「獨搖手」も亦た此れと同じ）——と言い、「大垂手」の歌辞

として南朝梁・吳均と晚唐・聶夷中の作を、「小垂手」の歌辞として南朝梁・吳均の作を載せる。また、『全唐詩』卷七四五には、晚唐・陳陶の「獨搖手」を載せる。

なお、南宋・曾慥『類説』卷十六「舞」に、——舞者樂之容。有「大垂手」「小垂手」、或像鷺鴻、或如飛燕〔舞なる者は樂の容なり。「大垂手」「小垂手」有り、或るいは鷺鴻に像にて、或るいは飛燕の如し〕——とある。

※射藥：天子が行う鹿狩り。「麋」は、鹿の一種。ノロジカ。

【通釈】

張籍の詩に、「後宮の女官たちは大きく手を垂らして「大垂手」という名の舞を舞う。天子様の寿命が千年万年まで続くようにと願うのだ。天子様は朝には狩りに出かけられてノロジカを弓で射て、夕暮れにお帰りになってお酒を飲まれる」と。古楽府に見える大垂手・小垂手・獨搖手は、いずれも舞の名である。

(中国文学専攻 学部三年 鈴木詩歩)

二十八

「南征賦」「時廓舒而浩蕩、復收斂而淒涼」。詞雖不工、自謂曲盡南遷時情狀也。

【訓読】

「南征の賦」の「時に廓舒にして浩蕩たり、復た收斂して淒涼たり」。詞は工ならずと雖も、自ら曲まがさに南遷の時の情狀を盡くせりと謂おもふなり。

【語釈】

※「南征賦」：唐庚が惠州（広東省）に流謫となった折りに作った

賦。開封から惠州までの道中の様子や旅情を詠う。徽宗の大觀四年（一一一〇）、唐庚四十歳の時の作。第二十一条および

【備考】を参照。

※「時廓舒」の二句：洞庭湖の南、瀟湘地区（湖南省南部）に差し

かかった折りの冬の風景を描いた部分。「廓舒」は空が広がるさま。「浩蕩」は広く大きいさま。「收斂」は雲や靄などがきれいに消えてなくなること。中唐・樊宗師の「絳守居園記」に、——奇士觀雲風霜露雨雪所為發生收斂、賦歌詩〔奇士は雲風霜露雨雪の為す所の發生收斂を觀て、歌詩を賦す〕——とある。「淒涼」は物寂しいさま。

晩唐・皎然の「與盧孟明別後宿南湖對月（盧孟明と別れし後ち南湖に宿りて月に對す）」詩に、——曠望煙霞盡、淒涼天地秋（曠望すれば煙霞は盡き、淒涼として天地は秋なり）——

——とあり、北宋・蘇軾の「中秋月」詩に、——暮雲收盡溢清寒、銀漢無聲轉玉盤〔暮雲 収まり盡くして 清寒溢れ、銀漢 声無く 玉盤轉ず〕——とあるように、あるいはこの時、雲や靄が晴れて空には都開封をも同時に照らす月が現れたという情景を描いているのかもしれない。

【通釈】

「南征の賦」に見える「時に空は虚しくどこまでも広がって、さらに雲や靄もすっかり消えてなくなり、物寂しげな景色が一層はつきりと映し出される」という一節について。言葉は巧みではないけれども、南に流謫された時の状況を、詳細に表現し尽くしていると、自分では思うのである。

【備考】

「南征賦」は、「始攝提之孟冬、余負罪而南馳（始め攝提の孟冬、余 罪を負ひて南に馳す）」の二句で始まる。「攝提」は歳星（木星）のことで、ここでは寅年を意味する。唐庚が惠州に流謫となった徽宗の大観四年（一一一〇）は、干支では庚寅にあたる。唐庚はこの年の孟冬十月に開封を出発したのである。一方、末尾の二句に「蓋明年之正月、始稅駕于羅浮（蓋し明年の正月、始めて駕を羅浮に税く）」とあり、翌年の正月には羅浮山のある惠州に到着したことが分かる。

また、「南征賦」には、多くの地名が詠み込まれており、それによって、開封から惠州まで、唐庚がどのような経路で旅をしたのかが確認できる。その経路を示すと、おおむね以下の通りとなる。

開封↓許（河南省許昌市）↓昆陽（河南省葉県）↓峴山（湖北省襄陽市）↓荊門山（湖北省宣都市）↓澧浦（湖南省西部）↓瀟湘（湖南省南部）↓郴嶺（湖南省郴州市）↓韶陽（広東省韶関市）↓真陽（広東省英徳市）↓清遠（広東省清遠市）↓羊城（広東省広州市）↓羅浮（広東省博羅県西北）↓惠州。

（中国文学専攻 学部三年 林 美江）

二十九

讀退之「羅池廟碑」「北方之人兮爲侯是非、千秋萬歲兮侯無我違」、輒流涕有感。

【訓読】

退之の「羅池廟の碑」の「北方の人は 侯の爲に是非するも、千秋萬歲 侯は我れに違ふこと無からん」を讀めば、輒ち涕を流して感ずる有り。

【語釈】

※退之：中唐・韓愈のこと。退之はその字。

※「羅池廟碑」：中唐・韓愈の「柳州羅池廟碑」。「羅池廟」は、柳

州（広西チワン族自治区）の刺史であった柳宗元の廟。柳宗元は、順宗の時、王叔文と王伾らを中心とする政治改革に参加し、宦官や藩鎮勢力を排除しようとしたが、順宗が病のため退位し、憲宗が即位すると、守旧派の巻き返しに遇い、王叔文と王伾の失脚に連坐し、永州（湖南省）の司馬に貶謫となった。この時、柳宗元のほかに劉禹錫など八人が連坐し、州の司馬として地方に流されたことから、世に「二王八司馬事件」と言う。柳宗元はその後、一旦は都に呼び戻されるものの、すぐさま今度は刺史として柳州への赴任を命じられ、そのまま彼の地で没することとなった。韓愈の「柳州羅池廟碑」は、善政により柳州の民を善導し、没して後も柳州の民から神霊と崇められている柳宗元の功績を、石に刻んで称えたもの。

※「北方」の二句：柳州の民に歌わせ柳宗元の霊を祀らせるために

韓愈が作った「迎享送神詩」の一節。「柳州羅池廟碑」の末尾に併せて石に刻まれた。「北方之人」は、北方の朝廷に仕える

高位の者たち。「是非」は、善し悪しを論ずること。

【通釈】

韓愈の「柳州羅池廟の碑」の「北の朝廷に仕える者たちは、柳侯に対してとやかく批評しているようだが、千年先も万年先も、柳侯は決して我ら柳州の民を見捨てることはないだろう」という一節を読めば、そのたびごとに涙が流れ心に感じるものがある。

（中国文学専攻 学部三年 古川愛子）

三十

『樂府解題』、熟讀大有詩材。余詩云「時難將進酒、家遠莫登樓」。用古樂府名作對也。

【訓読】

『樂府解題』は、熟讀すれば大いに詩材有り。余の詩に「時は難きも將に酒を進めんとす、家は遠くして樓に登ること莫し」と云ふ。古樂府の名を用ひて對を作るなり。

【語釈】

※『樂府解題』：樂府題の由来などを解説した書籍。『樂府解題』

と称された書籍に、①盛唐・吳兢の『樂府古題要解』、②盛唐

・郝昂（一説に、王昌齡）の『樂府古今題解』、③盛唐・劉餗

の『樂府古題解』、④北宋・劉次莊の『樂府集序解』などがあ

る。唐庚が言う『樂府解題』がいずれの書籍を指すかは定か

ではないが、ちなみに北宋・郭茂倩が『樂府詩集』の中で『樂

府解題』として引用するものは、①に後人が補注を加えたも

のと②である。ただし、②はわずか一篇のみの引用にすぎな

い（増田清秀『樂府の歴史的研究』「資料篇」、創文社、一九

七五年）。

※「時難」の二句：唐庚の現存の詩には、この二句はみえない。た

だし、「江陵逢故人宋德粹自播守罷歸南陽、以詩見貽、依韻和

酬（江陵にて故人の宋德粹の播守より罷めて南陽に歸るに逢

ふ、詩を以つて貽らるれば、韻に依りて和して酬ゆ）」詩に、

「歳晚莫登樓（歳晚 樓に登ること莫かれ）」という句がある。

※將進酒：樂府題の一つ。「鼓吹曲辞」に属する。北宋・郭茂倩の

『樂府詩集』卷十六に漢代の古辞が、また卷十七に梁の昭明

太子および唐の李白・元稹・李賀の作が収められている。

※登樓：樂府題の一つ。「雜曲歌辞」に属する。北宋・郭茂倩の『樂

府詩集』卷七十七に南朝宋の范曄の妻沈氏の「登樓曲」が収められている。

※古樂府：ここでは、唐代以降に作られた新題樂府に対して、漢魏

六朝期に作られた樂府題を指している。

【通釈】

『樂府解題』は、熟読すれば大いに詩の材料を見つけると

が出来た。私の詩に「時代は災難に見舞われているにもか

かわらず、今にも酒をさし出そうとしている。家は遠いので

樓閣に登って眺めることもない」とある。古樂府の題を用い

て対句を作ってみたのである。

（中国文学専攻 学部二年 袴田悠太）

三十一

過岳陽樓觀杜子美詩、不過四十字爾、氣象閑放、涵蓄深遠、

殆與洞庭爭雄、所謂「富哉言乎」者。太白・退之輩率爲大篇、

極其筆力、終不逮也。杜詩雖小而大、餘詩雖大而小。

【訓読】

岳陽樓に過ぎりて杜子美の詩を観れば、四十字に過ぎざるのみなるも、氣象は閑放、涵蓄は深遠にして、殆ど洞庭と雄を争ふ。所謂「富めるかな言や」なる者なり。太白・退之の輩は率ね大篇を爲らんとし、其の筆力を極むるも、終に逮ばざるなり。杜詩は小なりと雖も而れども大にして、餘詩は大なりと雖も而れども小なり。

【語釈】

※岳陽樓：岳陽城（湖南省）の西門に建てられた樓閣。西のかた、

眼下に洞庭湖を一望することができる。北宋・范致明の『岳

陽風土記』に、——岳陽樓、城西門樓也。下瞰洞庭、景物寬

闊。開元四年、中書令張説、除守此州。每與才士登樓賦詩。

自爾名著（岳陽樓は、城の西門の樓なり。下は洞庭を瞰、景

物 寬闊たり。開元四年（七二六）、中書令の張説、除せられ

て此の州に守たり。毎に才士と樓に登り詩を賦す。爾れより

名 著はる）——とある。しかし、張説の詩およびそれに唱

和した趙冬曦や尹懋の詩では、この樓閣を「南樓（役所の南

にあたることによる呼称）」と称しており、岳陽樓の名はまだ

見えない。岳陽樓の名が詩に見られるようになるのは、乾元

二年（七五九）の作とされる李白の「與夏十二登岳陽樓（夏

十二と岳陽樓に登る）」詩や、賈至の「岳陽樓重宴別王八員外
貶長沙（岳陽樓にて重ねて宴し、王八員外の長沙に貶さるる
に別る）」詩あたりからである。ただ、その名を一躍有名にし
たのは、ほかでもなく大曆三年（七六八）の作とされる杜甫
の「登岳陽樓（岳陽樓に登る）」詩である。詳しくは、『漢詩
の事典』（松浦友久編、大修館書店、一九九九年）の「Ⅲ名詩
のふるさと（詩跡）」（植木久行著）を参照。

※杜子美詩：盛唐・杜甫（字は子美）の五言律詩「登岳陽樓（岳陽

樓に登る）」を指す。

※氣象閑放：氣韻・風格が広大で奔放であること。

※涵蓄深遠：言葉に込められた意味が奥深いこと。

※洞庭：湖北省と湖南省の境にある大きな湖。その東岸に岳陽樓が

建っている。杜甫の「登岳陽樓（岳陽樓に登る）」詩の冒頭に

も、——昔聞洞庭水、今上岳陽樓（昔聞く洞庭の水、今上

る岳陽の樓）——と歌われている。

※「富哉言乎」：孔子が樊遲に向かって言った言葉の意味を、弟子

の子夏が樊遲に解説した際に発した言葉の一節。孔子の言葉

が充実した内容であることを言う。『論語』顔淵篇に見える。

※太白：盛唐・李白のこと。太白はその字。

※退之：中唐・韓愈のこと。退之はその字。

【通釈】

岳陽樓に立ち寄り杜甫の詩を觀賞してみると、わずか四字にすぎないのに、風格は広大で奔放、言葉に込められた意味は奥深く、ほとんど広大で深遠な洞庭湖と雄を競うかのようで、いわゆる「充実しているではないか、その言葉たるや」という表現の通りである。李白や韓愈などは、おおむね大篇を作ろうとして、筆力の限りを尽くすが、結局のところ杜甫には及ばないのである。杜甫の詩は、小篇であってもスケールが大きく、その他の詩人の詩は、大篇であったとしてもスケールが小さいのである。

(中国文学専攻 学部二年 長谷川浩平)

三十二

凡作詩、平居須收拾詩材以備用。退之作「范陽盧殷墓誌」

云「於書無所不讀。然止用以資爲詩」是也。

【訓読】

凡そ詩を作るに、平居より須らく詩材を收拾して以つて用ふるに備ふべし。退之の「范陽の盧殷の墓誌」を作りて「書に於いて讀まざる所無し。然れども止だ用ふるに資を以つて詩を爲るのみ」と云ふは、是れなり。

【語釈】

※退之：中唐・韓愈のこと。退之はその字。

※「范陽盧殷墓誌」：中唐・韓愈の「登封縣尉盧殷墓誌」(『東雅堂

昌黎集註』卷二十五)のこと。韓愈の墓誌によれば、盧殷は

范陽(河北省)の人で、憲宗の元和五年(八一〇)十月、登

封県(河南省)の尉の時に六十五歳で亡くなったという。

※「於書」の一節：中唐・韓愈の「登封縣尉盧殷墓誌」(『東雅堂昌

黎集註』卷二十五)に見える、盧殷の生前の読書の有り様を

述べた一節。ただし、前半は「無書不讀(書として讀まざる

は無し)」に作る。「どんな書籍でも読むが、ただそれらの書

籍は、そこに書かれた事柄を元手として詩を作るために用い

たにすぎない」の意。「資」は元手、の意。

【通釈】

おおよそ詩を作るには、平素より必ず詩の材料を拾い集めて、使用する際の備えとしておかなければならない。韓愈が

「范陽の盧殷の墓誌」を作つて、「書籍については読まないものはない。しかしそれらの書籍は、ただそこに書かれてある事柄を元手として詩を作るために用いたにすぎない」と言つてゐる通りである。

(人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程二年 大島絵莉香)

三十三

詩疏不可不閱。詩材最多。其載諺語、如「絡緯鳴、懶婦驚」之類、尤宜入詩用。

【訓読】

詩の疏はけみ閲さざるべからざるなり。詩材 最も多ければなり。其の諺語を載するに、「絡緯 鳴けば、懶婦 驚く」が如きの類は、尤も宜しく詩に入りて用ふべし。

【語釈】

※詩疏：初唐・孔穎達の『毛詩注疏』のこと。『詩経（毛詩）』に關

する漢代以来の注釈を集めたうえに、自らの注釈を加えたも

の。「疏」は注釈の意。

※「絡緯」の二句：『毛詩注疏』卷十「国風・唐風」の「蟋蟀在堂

〔蟋蟀 堂に在り〕」詩の注疏に引く、三国呉・陸璣の『毛詩

草木鳥獸蟲魚疏』に見える「里語」。ただし、「趨織鳴、懶婦

驚〔趨織 鳴けば、懶婦 驚く〕」に作る。「絡緯」「趨織」は、

コオロギやクツワムシ、キリギリスなどの秋の夜に鳴く虫。

機織り虫。羽を振るわせて鳴くその声が、糸を紡ぐ音に似て

いたり、機織りを促すように聞こえることによる命名。「懶婦」

は、「懶婦」に同じ。機織り仕事を怠けている婦人。

【通釈】

詩の疏は閲覧しないわけにはいかない。詩の材料が最も豊富であるからだ。俗諺を記載するにあたり、「機織り虫が鳴くと、機織り仕事を怠けていた婦人たちがはつと驚く」といった例などは、とりわけ詩の中に取り入れて使用するに相応しい。

(人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程二年 大島絵莉香)

三十四

謝玄暉詩云「寒城一以眺、平楚正蒼然」。「平楚」、猶平野

也。呂延濟乃用「翹翹錯薪、言刈其楚」、謂「楚、木叢」。便覺意象殊窘。凡五臣之陋、類若此。

【訓読】

謝玄暉の詩に「寒城より一たび以つて眺むれば、平楚は正に蒼然たり」と云ふ。「平楚」とは、猶ほ平野のごときなり。

呂延濟 乃ち「翹翹たる錯薪、言れ其の楚を刈る」を用ひて、

「楚は、木の叢るなり」と謂ふ。便ち意象 殊に窘しきを覺ゆ。凡そ五臣の陋たること、類ね此くの若し。

【語釈】

※謝玄暉：南朝齊の謝朓のこと。玄暉はその字。宣城郡の太守に就任した経歴を持つことから、謝宣城とも称される。

※「寒城」の二句：謝朓が宣城郡の太守であった時、郡の城壁の上から郊外を望み見た折りに作つた「郡内登望」詩の一節。『文選』卷三十に収められている。

※平楚：①「平林（木々の高さが等しく平らに見える林）」の意と、

②「平野（平らな原野）」の意とがある。①の意で解釈するものが通説であるが、唐庚は②の意で解釈すべきだと主張する。

ちなみに、明・楊慎は『升菴詩話』卷二「平楚」の中で、謝

朓の「郡内登望」詩の二句を引用したうえで、——楚、叢木也。登高望遠、見木杪如平地。故云平楚。猶詩所謂平林也（楚とは、叢がる木なり。高きに登りて遠きを望めば、木杪を見ること平地の如し。故に平楚と云ふ。猶ほ詩に謂ふ所の平林のごときなり）——と言う。

※蒼然：唐・呂延濟は「草木の色」（『文選』卷三十）と注するが、

「広く果てしないさま」の意で解釈すべきであろう。後の時代の例ではあるが、盛唐・參岑の「與高適薛據登慈恩寺浮圖

「高適・薛據と慈恩寺の浮圖に登る」詩に、——秋色從西來、

蒼然滿關中（秋色 西より來たる、蒼然として關中に滿つ）

——とあり、盛唐・李白の「秋登巴陵望洞庭（秋に巴陵に登りて洞庭を望む）」詩にも、——秋色何蒼然、際海俱澄鮮（秋色 何ぞ蒼然たる、際海 俱に澄鮮たり）——とあるように、

ここでも秋の景色がどこまでも果てしなく広がるさまを形容してよいよう。

※呂延濟：『文選』の注釈者の一人。『文選』のテキストには、唐

の李善が注を付けた李善注本と呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の五人が注を付けた五臣注本とがある。今日ではそれ

らを合わせた六臣注本が通行している。

※「翹翹」の二句：『詩経』周南・漢廣の一節。「翹翹」は、高い

さま。「錯薪」は、枝が乱雑に伸び放題になっている木。「楚」は、特に高く伸びた木。

※意象：印象。

※着：窮屈なこと。「平楚」を「平らな林」と捉えようと、木の高さの分だけ、空間が制限され、視界も狭まることから、「平らな原野」に比べて、窮屈な感じになることをいうのであろう。

※五臣之陋：五臣の注釈が浅はかであること。ここでは「平野」の

意とすべき「平楚」という語について、五臣の一人である呂延済が『詩経』周南・漢廣の一節に基づいて、木の群がるさまと誤解していることを指す。確かに呂延済は、「平楚、木叢也（平楚は、木の叢るなり）」と注しているが、『詩経』の一節を直接引用してはいない。そもそも『詩経』の一節を引用しているのは李善であり、さらに李善はその後に続けて『説文解字』の「楚、叢木也（楚は、叢がる木なり）」を引用しているのである。「楚」を群がる木としているのは、李善も同様であり、この例でもって、五臣注のみを浅はかだとするのは、公平性に欠けるであらう。

【通釈】

謝朓の詩に「冷氣に満ちた城楼に登って辺りを一望すれば、平らな原野に、秋の景色がはてしなく広がっている」と歌う。

「平楚」とは、平らにひろがる原野と同じ意味である。ところが呂延済はあろうことか『詩経』の「高々と伸び放題に枝を伸ばしている雑木、そのとりわけ高く伸びた木を切る」という一節に基づいて、「楚とは、木の群がるさま」の意と言う。もしそうだとすれば、この句から受ける印象は、すっかり窮屈なものになると感じるであらう。おおよそ五臣の注釈の浅はかさは、おおむねこのような感じである。

（人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程二年 大島絵莉香）

三十五

古之作者、初無意于造語、所謂「因事以陳詞」。如杜子美「北征」一篇、直紀行役爾、忽云「或紅如丹砂、或黑如點漆。雨露之所濡、甘苦齊結實」。此類是也。文章只如人作家書乃是。

【訓読】

古の作者、初めより造語に意無く、所謂「事に因りて以つ

て詞を陳ぬ」なり。杜子美の「北征」一篇の如きは、直だ役に行くを紀すのみなるも、忽ち「或るいは紅きこと丹砂の如く、或るいは黒きこと點漆の如し。雨露の濡ふ所、甘苦 齊しく實を結ぶ」と云ふ。此れ是れに類たるなり。文章は只だ人の家書を作るが如くすれば、乃ち是なり。

【語釈】

※「因事以陳詞」：中唐・韓愈の「答胡直均書〔胡直均に答ふる書〕」

（『五百家注昌黎文集』卷十七）に見える言葉。胡直均が作つ

た「講禮」「釋友」の二篇の文章を褒めたもの。作為によらず、眼前の事象・事物に従って、自然と出てきた言葉を連ねて文章を作ること。

※杜子美：盛唐・杜甫のこと。子美はその字。

※「北征」：杜甫の詩。至徳二年（七五七）、四十六歳の時の作。

鳳翔（陝西省）にあつた肅宗の安在所から、北のかた鄜州（陝西省）にいる家族のもとに赴く折りの道中の様子と、家族の許に到着した時の様子を詠つたもの。杜甫は前年の至徳元年（七五六）、安祿山の乱を避けるため、家族を鄜州に避難させていた。

※「或紅」の四句：杜甫の「北征」詩の一節。鄜州へ向かう道中、

ふと目にした山の木の實を詠つたもの。「丹砂」は、赤色の砂礫で、仙薬とされたもの。「點漆」は、真つ黒な漆。いずれも木の實の色を比喩する。

※家書：家族宛ての手紙。

【通釈】

昔の詩文の作り手は、言葉を造り出してやろうという気持ちさらさらなく、いわゆる「眼前の事象・事物に従って、自然と出てきた言葉を陳述する」という姿勢であつた。杜甫の「北征」詩などは、ただ戦火の中、旅を続けることを記した作にすぎないが、ふと「あるものは丹砂のように赤く、あるものは漆のように黒い。雨や露に潤されて、甘いものも苦いものも、ひとしく実を結んでいる」と、道中で目にした山の木の實の様子を詠う。これなどはその一例と言えよう。文章というものは、ただ家族へ手紙を書くように書きさえすれば、実はそれでよいのである。

（人文学専攻中国文学専門 博士課程後期課程二年 大島絵莉香）

《補遺》

「第四条」に、「三謝の詩」についての唐庚の言及が見られるが、

前稿掲載後に、唐庚が『文選』の中から、謝靈運詩四十首・謝惠連詩五首・謝朓詩二十一首を集めて、『三謝詩』という詩集を編纂していることを、新たに知った。補遺としてここに記しておく。

〔付記〕

本稿は、二〇一三年度に実施した名古屋大学文学部「中国文学

特殊研究（詩話を読む）」における成果である。担当者の発表原

稿・資料をもとに、大島と矢田がそれらを整理し修正を加えた。

担当者の所属・学年は二〇一三年度当時のものである。